
透析室災害対策

(古高和子ほか、透析ケア 12: 693-706、2006)

2015年10月16日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

【災害時患者連絡方法の確立】

古高 和子 小千谷総合病院十日町診療所次長透析療法指導看護師

1. 患者連絡先情報の収集は多面的に、そして常時更新して

緊急時のお願いとして、本人及び同居家族の携帯電話番号、別居の家族あるいは親類で連絡を取りやすい人の携帯または固定電話を、書面でとらせてもらう。また、複数の連絡先はカルテだけでなく、非常持ち出し名簿として生年月日、原疾患、血液型、感染症、ドライウエイトなどの情報を入れた一覧表としてプリントし活用する。

2. 患者が必ずつながっている行政との協働を重要視し活用する

被災翌日、診療所は電気もつかずパソコンもファクシミリも使えなかったが、それができない行政機関はなかった。被災時にはどうしても、行政機関からの援助が必要になる。地域行政と医療者が協働できなければ、災害時の対応は難しいだろう。

3. 想像以上に使えない電話に代わる連絡方法を

そのほかの連絡方法として、災害時伝言ダイヤルの利用を計画している施設が多くみられるが、患者は非常に早急に回答を求めてくる。ところが、支援側の施設はそれほど短時間では決定できない。その時間差を十分配慮した計画でないと、効果が得られないばかりか、混乱の原因となりかねない。マスコミを利用しテレビやラジオで、連絡事項を放送してもらうほうが確実だと考えられる。

4. 行政担当者との顔のわかる関係から災害時の対応を築きあげていこう

日常から、医療者側から積極的に行政機関へのはたらきかけを行い、お互いが相手の立場に立って、譲歩し合える関係づくりをすることである。行政機関の大きさや、過去からの関係によっては、はじめからはうまくいかないかもしれない。とりあえず「透析患者を担当しているのはどこでしょう」と、問い合わせてみてほしい。

【患者カードの作成と活用法】

赤塚 東司雄 心施会府中クリニック院長

1. 災害時透析患者カードは内容を充実させようとしないうこと。本当に必要な情報の絞

り込みが情報の正確性の確保につながり(更新時の手間の軽減も含め)、ひいては長続きのコツとなる。

2. 災害対策すべてに通じる基本姿勢は、日常診療でやっていることを災害時に応用可能とすることである。災害対策のためだけの対策を次々と考えることはやめるべきであろう。災害の大パニックのときに、普段やらないことを思い出すはずがない。災害時透析患者カードでいえば、「どうやっていつも携行してもらうか」というノウハウの問題が大きい。残念ながら指導しても無駄である。「自然と手が伸びるようになるにはどうするか」を考えよう。

【患者の災害教育】

富永 正志 心施会南大沢パオレ腎クリニック透析室臨床技術課主任

1. 災害をイメージしてもらうためにはどうするか
 - ① 災害をイメージしてもらうためのビデオ視聴を行う。視聴する目的や趣旨を説明し、訓練に結びつけていく。
 - ② 訓練の被害想定を明確にし、訓練の目的や自施設の対応などを説明する。訓練前に被害想定・被害状況などのプリントを配り、患者にも災害をイメージしてもらう。
 - ③ 災害をイメージできてから訓練を行う。「自分の身の安全は自らが守る」という基本的考えをもってもらい、そして次に、お互い助け合う共助の考えをもってもらい。
2. 災害時透析患者カードをいつも身につけてもらうためにはどうするか
 - ① 災害時透析患者カードの更新ができていないか、情報が古くないか確認する。更新する情報と更新しない情報を区別する。透析条件のなかでも、個人的に体格差があって、変動し、正確に知りたい項目がドライウエイトである。そこで透析室にも持参してもらい、変更があればその部分だけでも日付を記入し更新する。
 - ② 内容の問題ではなく、運用の問題であることを認識する。
3. 災害に対する認識を高めるためにできることは何か
 - ① 防災のパンフレットよりポイントをクローズアップして数回に分けて掲示する。
 - ② 患者に声かけして意識を高める。
 - ③ 災害用伝言ダイヤルの利用方法を身につけてもらう。
 - ④ 避難用の履物を準備し、ベッドにぶら下げるなどして目に見える形で認識を高める。